

1. 平成29年度の進め方 (第1回)

平成28年度までの総合教育会議を踏まえ、「子どもたちの多様性に寄り添う教育」について、下記の4つの視点で、年間を通して考えていくこととした。

- (1) 系統的な教育
- (2) 特別支援教育の充実
- (3) 滋賀の地域性を生かした学びの創出
- (4) 学校と家庭・地域の連携

事務局の提案した4つの視点で子どもたちの多様性について考えていくとしつつも、「子どもたちの多様性」という表現については子どもたち本人から見れば「個性」であり、年間の議論を終える時に振り返ることとした。

「子どもたちの多様性」
についての振り返り

3. 全体総括

2. 各テーマの総括

各テーマの主な意見

(1) 子どもたちの学びをつなぐ取組 (第2回)

- ・なぜ、教科間連携が必要か。算数の問題を解く場合でも問題文を理解するなど総合的な能力が必要。
- ・いろいろな知識を働かせて考える課題解決型の学習が求められる。
- ・次の学校で何を学ぶのか、前の学校で何を学んできたのか、校種間を越えた全体の見通しが必要。

(2) インクルーシブ教育システムの構築に向けて (第3回)

- ・多様な学びの場を、障害のある子どもたちに準備をしていくことが必要。
- ・学校卒業後も地域社会で生活していくことから、地域全体で障害のある子どもたちを見守るべき。
- ・保護者と学校が思いを共有することが何より大切。

(3) 子どもたちが滋賀を知り、滋賀に愛着を持ち、滋賀を豊かにする力を育むために (第4回前半)

- ・自分の地域の魅力を知ると他の地域と比べられる力もつく。また、他の地域を知るとは自分の地域を知る上でも大切である。
- ・地域のものを地域で大切にすることは重要であるが、他の地域や世界と繋げ、開かれたものにすれば、持続可能な地域につながる。
- ・コミュニティ・スクールによって、学校の取組を地域に発信するのみならず、学校運営方針の承認等で地域の方が学校に関わってくれるようになり、地域との関係がより強くなった。

(4) 社会全体で子どもたちを育てる滋賀の教育 (第4回後半)

- ・家庭では、「褒める」と「叱る」の関係が大切であり、家庭で愛情をもってからこそ子どもは受け止められる。子どもたちの生活習慣等の基礎が家庭で作られることで、学校での教育にもつながる。
- ・家庭で親子の対話があつてこそ生活習慣等が培われる。「何をさせないか」ではなく「何をさせるか」という今あるものを有効に活用する前向きなメッセージの発信が必要。
- ・幼児期からの過ごし方も非常に重要であり、家庭の教育のあり方についても考える必要がある。

各テーマの総括

子どもたちの学びが学年間・教科間でつながるようカリキュラム・マネジメントの充実を図る。幼から小、小から中、中から高へと円滑な接続を目指す。

障害のある子どもも、障害のない子どもも一人ひとりが様々な力を持っており、こうした子どもたちの力を、学校だけでなく地域も含めた社会全体で引き出し、互いに認め合い、育つために多様な学びの場を整備する。

地域学習による体験を通じて、地域の課題は何か、どう対応すべきかなどを主体的に考え、関わる力を育む。
さらに、地域学習の充実により、地域に愛着を持ち、自然や地域と共生する力を育む。

家庭や地域を含めた社会全体で子どもたちを育てる滋賀の教育を目指すために、学校の取組だけでなく、保護者、家庭等への理解を呼びかける。

各回の総括を踏まえた
平成29年度総合教育会議のまとめ

学校
・
家庭
・
地域

「子どもたちの多様な個性を社会全体で育む滋賀の教育」に向けて取り組む。